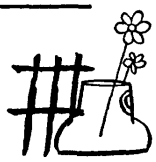
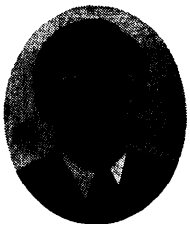
巻頭言



情報化社会に想う

明午　慶一郎†



1980年代に入って，ここ数年急激に情報化社会についての議論が盛んに行われるようになった．

特に第5世代コンピュータ開発プロジェクトの発足，電電公社による INS 構想の発表，普及，或いは A. トフラーの“第3の波”の出版等による刺激もあったと思われるが，これらの議論は，技術的にはエレクトロニクスとオプトエレクトロニクスの結合と発達に加えるに知識工学の進歩によるものであると考えられる．議論の中には，余りにも未来の先取り的なホームショッピング，ホームオートメーション，在宅勤務といった，家庭中心的なアプリケーションを強調し過ぎる場合もある．もちろん，ファームバンギングや VAN などのアプリケーションも言われているが，これ等は現在の機器や設備でも可能であろうし，情報化社会論の一例としては一寸物足らぬ気もする．

一方，INS や CATV を含めたニューメディア論はそれなりに筋が通っているように思われる．INS の構想はあらゆる情報，即ち音声，文字，図形，写真等をすべてデジタル化して大容量の媒体を使って送受信しようとするもので，しかも料金体系としては従来の電話やファクシミリの従時間，従距離の考え方を進歩させて，時間距離の壁を無くして送った総ビット量にしたいと言う魅力的なものである．又 CATV はご存知のようにアメリカでは相当普及しているが，非常に多くの TV チャンネルが提供される上に，2方向のメディアであると言う特徴がある．

情報化社会は，情報の搬送媒体であるニューメディアと，情報の処理，加工，コントロール機能を司るコンピュータシステムとの結合が，ますます強化されたら具現されてくるだろう．家庭に与える影響は，便利な，より充実したエンジョイアブルなものであろうが，ビジネスに与える影響は，ホワイトカラーの生産性を左右するものだろう．人間社会の GNP の主力が農業→工業→情報と移動するのであるならば，日本における情報化社会の実現時期は，国際競争力の上からも，極めて重要である．

25周年を迎えた情報処理学会は，構成する教育，メーカ，利用，研究の各々の分野での研究の側面からの貢献が，現在程期待される時代はなかったであろう．今後の社会は，競争と協力だと言われているが，日本独自にすべての分野で情報化社会を目指しさえすれば遅れを取る恐れはないのであろうか．

もちろん，先に述べたニューメディア，コンピュータハードウェア（第5世代が完成すれば万全であるが），通信システム，アーキテクチャ等の分野では，余り心配はないのであるが……．

OA の目指すものも，情報化社会に期待するものも，ビジネス，研究，調査機関，学校，官公庁等々のオフィスにおいては，付加価値の向上や生産性の向上であろう．そしてそのためには現在より数段上の有益な膨大な情報と処理をするアプリケーション・ソフトを必要としている．“コンピュータ白書 83”も指摘するように，欧米との比較では，我が国のデータベースの立ち遅れと，汎用アプリケーションの流通比率の低さ（アメリカとは1桁以上，欧州と1桁近く）が気掛りな点ではないかと思われる．

幸い近頃は我が国のデータベースも活発化の兆しがあり更にパソコンの普及は，「アプリケーションソフトは自作するより買った方が手っ取り早い」との概念をユーザに与え，ソフトメーカへの集中開発への刺激にもなって来ている．

何れにしても，限られた情報処理技術者が実現させる日本の情報化社会は，競争と協力を上手く国内外に使い分けて行くべきであろう．

（昭和59年1月18日）

† 本会常務理事　日本アイビーエム(株)